



レンズを通して

写真・文 高円宮妃久子殿下

コクガン 61cm カモ科

極北部で繁殖し、冬は西ヨーロッパ、北米の沿岸に渡来する。アジアでは日本の北海道、本州北部の沿岸で越冬するほか、朝鮮半島にも渡ると思われるが調査中。写真は1月の早朝、アオサを食べる2羽のオスと6羽のメス。オスは体が大きいので、見分けが付きやすい。青く冴えわたった南三陸の空も美しかった。



ハクガン 67cm カモ科

北米大陸、グリーンランドの北極圏とロシアの

ウランゲリ島で繁殖する。

北米のカリフォルニア湾、

メキシコ湾周辺などで越冬する。

日本では迷鳥として

少数渡来するだけだったが

近年は少しずつ増加傾向にある。

個体数の多いアメリカでは狩猟鳥。

写真はマガンの群の中にいるハクガン。

ポール・ギャリコの

小説『白雁物語』で一躍有名(?)に。

ヒシクイ(写真はオオヒシクイ)

78~100cm カモ科

スカンジナビア半島以東の

ユーラシア大陸北部で繁殖し、

ヨーロッパ中南部、中央アジア、

東アジアで越冬する。

5亜種に分かれ、

日本では3亜種が記録されている。

大きさかなりの違いがあり、

オオヒシクイが最も大きい。

本州以北の農耕地、

湖沼で越冬し落ち穂、水草などを食べる。

写真は日の出とともに

一斉にねぐらを飛び立って

餌場に向かうオオヒシクイ。

雁渡る

写真文 高円宮妃久子

酷暑と台風に気を取られている内に、冬鳥が到来する季節となりました。なかでも、特にガンの渡来は感動的であり、日本の風物詩としてテレビや新聞で報道されます。これまでマガンやカリガネ、シジュウカラガン、また国外で撮ったハイイロガンやカオジロガンなどの写真をご紹介しますが、今回のコクガン、ハクガン、そしてオオヒシクイは初お披露目です。ガンの仲間の大半が宮城県で越冬すると言われており、今回の写真はすべて宮城県で撮ったものになりました。

コクガンとハクガンはともにかわいい顔をした小型のガンです。コクガンの越冬は2500羽ほどになっており、群を形成して行動していますが、ハクガンは未だ1羽か2羽がマガンやハクチョウの群に交ざっているところしか見たことがありません。昨年、宮城県には340羽の渡来があり、その中には多くの幼鳥が含まれていたと聞きますので、そう遠くない将来に白い群を観察できるのが楽しみです。

ガンは昔から人間の大事な食料源であり、現在でも世界の多くの国で狩猟対象となっています。日本では明治になって銃猟が解禁になると乱獲が始まり、数が激減いたしました。昭和46年、ヒシクイはマガン、コクガンとともに国の天然記念物に指定され、禁猟種となりました。現在、ヒシクイやマガンの仲間は全国に相当数渡ってきています。

地域によっても異なりますが、世界中の多くのガンは人間と適度な距離を保ちながら、牧草地や農耕地で草や茎、根、種子、実や豆などを採餌して生きています。日本でも農業や畜産業のおこぼれにあずかっており、落ち穂、そして近年ではこぼれた飼料用トウモロコシのデントコーンに



依存しているようです。デントコーンは、実だけでなく茎も栄養価が高く、家畜の飼料として優れており、多くの酪農家等が栽培しています。さぞかし美味しいのでしょう。味をしめたヒシクイやマガンがそこに居座り、最終目的越冬地まで南下しないケースもあるそうです。

そのようななか、コクガンの主な食資源は海藻と海藻です。日本では浅い海や内湾などを利用して、アマモやアオサ類、アオノリ類などを食べています。東日本大震災のあと、南三陸沿岸部ではコクガンの姿が見られなくなりました。地震と津波によって生息環境や食性がダメージを受けたものと考えられます。近年、彼らの姿がまた見られるということは、海環境が復活した証でしょう。嬉しい限りです。

今年10月、200種類以上の海藻が確認されている宮城県南三陸町の志津川湾約5800ヘクタールが、国際的に重要な湿地の保全を目指す「ラムサール条約」に登録されることになりました。ニュース報道では、黒潮と親潮などによる豊かな生態系が形成されていることの説明があり、国の天然記念物コクガンの越冬地との紹介とともに、コクガンの姿が映し出されました。

日本人は遠い国から無事に戻ってきたくれたガンを、「けふからは日本の雁ぞ 楽に寝よ」と一茶の句にあるように、温かく迎え入れてきました。「雁」は晩秋の季語であり、「雁帰る」と言えば春です。日本には、四季折々の移ろいや豊かな自然の情景を映し出す言葉がたくさんあります。

近年、今までにない豪雨や台風規模・進路に恐怖感を覚えると同時に、日本人が当たり前と思っていた四季折々の景色が変わりつつある現実には戸惑いを感じます。今見るひとつひとつの光景に心から感謝し、記憶にとどめておきましょう。そして環境に優しい生活を心掛けつつ、新たに生まれ来る四季の光景が、少しでも美しいものであることを祈るばかり。願掛けならぬ「雁掛け」とでも申しませうか。